平成 22 年度　自己心理学研究分科会活動報告

平成 22 年度の自己心理学研究分科会の主な活動は以下の通りであった。

Ⅰ．自己心理学関連のワークショップ・シンポジウム

日本心理学会第 74 回大会（2010 年 9 月 20 日～22 日・大阪大学）

(1)「現代青年の自己の諸相―アイデンティティ、キャリア形成および精神的健康をめぐって―」

企画者　　田中　道弘（埼玉学園大学）・浦田　悠（京都大学）
司会者　　渥美　純子（名城大学）
話題提供者　大西　将史（浜松医科大学）・中谷　陽輔（同志社大学）
　　・三保　紀裕（関西大学）・田中　道弘（埼玉学園大学）
指定討論者　榎本　博明（名城大学）・梶原　佳子（九州保健福祉大学）

本ワークショップは、現代青年の自己の諸相として、アイデンティティ、キャリア形成および精神的健康をめぐって学際的な議論を深めることを目的で行われた。現代青年を語るうえで、アイデンティティ、精神的健康、およびキャリア形成は、それぞれ重要な意味を持つ。ワークショップを通して、それらがどのように関りあいながら、現代青年の自己に影響を及ぼしているのかが議論された。三保氏は、大学進学理由による学生類型からみた自己の諸相を報告した。中谷氏は、Berzonsky によるアイデンティティ・スタイル理論と、それに基づく Identity Style Inventory 日本語版の作成及び分析結果を報告した。田中氏には、自己肯定感から見た精神的健康について議論して頂いた。大西氏からは、自己呈示としての謝罪が状況によってどのように使いわけられるのか、そしてそれが精神的健康とどのように結びついているのかについて検討した。指定討論では、この領域において先導的研究を展開してこられた榎本博明氏と梶原佳子氏という二人の指定討論者からの批判的論考を踏まえ、活発な議論・検討がなされた。

(2)「自己心理学における文化の問題（８）」

企画者　　榎本博明（名城大学）・小林　亮（玉川大学）
司会者　　小林　亮（玉川大学）
話題提供者　榎本博明（名城大学）・塘　利枝子（同志社女子大学）・堀　正（群馬大学）
指定討論者　東　洋（東京大学）・小林　亮（玉川大学）

私たちの生における諸体験の主体である「自己」は、文化という意味空間の中で「人生の語り」を紡いでゆく。このことを踏まえ、今回のワークショップでは、数年にわたる議論をふまえ、自己の体験に意味を与える価値の形成において、文化のもつ意味空間がどのような役割を果たすかを具

体的な事例に即して検討しようとする試みで行われた。榎本氏は、長年にわたる自己心理学研究の成果をふまえ、自己の語りという行為そのものに文化という変数がどう関わるかを生涯発達的視野のもとに考察した。塘氏は、東アジア４ヶ国（日本、韓国、中国、台湾）の 1950～2000 年の教科書に描かれた親子関係に焦点をあて、親子間の自己表出のあり方と共に、子どもに期待された自己のあり方が、各国・社会内でどう変化してきたのかを、社会・経済的変動の関与を含めて検討した。堀氏は、多くの言語に訳され世界中で読まれている絵本“The Giving Tree”が、読み手によってどのように多様に解釈されるかを大学生のデータをもとに考え、絵本を投影法的心理テストとして使う可能性を探った。

(3)「フランクルとマズローの再評価－人生の意味を問う心理学に向けて」

企画者　　榎本博明（名城大学）
司会者　　堀　正（群馬大学）
話題提供者　亀田　研（名古屋大学）・浦田　悠（京都大学）・榎本博明（名城大学）
指定討論者　岡堂　哲雄（聖徳大学）

本ワークショップは、フランクルおよびマズローの理論のもつ意味や価値を再考し、現代社会に活かす方向性を模索することを目的として行われた。フランクルによる意味への意志の視点は臨床現場において、マズローの欲求の階層説と自己実現の視点は産業界において活かされてきた。このところ両者の名前を心理学研究の世界で耳にすることが少ないが、現代人の生きることの閉塞感をとらえるには、これらの視点は非常に重要なものと考えられる。亀田氏は生きる意味を問う背景要因の実証的結果を示しつつその理論的背景について考察した。浦田氏は人生の意味の研究を紹介しつつ自己超越を核とした人生の意味の深さについて考察した。榎本氏はかつて自己実現尺度を開発した立場から意味への志向性と自己実現に関する調査データも含めて精神的健康概念についての考察を行った。ＰＩＬの開発者である岡堂氏には、精神的健康に関する専門家の立場からコメントや問題提起を頂き、フランクル理論やマズロー理論を再評価するための有意義な議論が展開された。

(4)「生と死の実存的意味に関する心理学的研究（3）
―Terror Management Theory（TMT）をめぐって―」

企画者　　浦田　悠（京都大学）・福井　斉（京都大学）
司会者　　浦田　悠（京都大学）
話題提供者　向井　有理子（大阪市立大学）・浦田　悠（京都大学）・福井　斉（関西大学）
指定討論者　脇本　竜太郎（安田女子大学）・松田　信樹（兵庫大学短期大学部）

生と死の実存的問題については、1980 年以降、実験社会心理学的な手法を用いた研究が多くなされており、それらは、「実験実存心理学（experimental existential psychology）」という領域と

してまとめられつつある。そして、その主軸たる理論が Terror Management Theory（TMT：恐怖管理理論・存在脅威管理理論）である。TMT に基づいた研究では、死すべき運命に気づくことによって生じる存在論的恐怖が社会的行動の究極的な説明要因であるという理論的仮定の下で、人がなぜ自尊感情を維持しようとするのか、なぜ自らが属する文化的世界観を（他の世界観を排除してまでも）堅持しようとするのか、というような問題に関して多くの実験や調査が行われてきた。本ワークショップでは、このような TMT の概要を紹介するとともに、我が国におけるいくつかの研究知見、および TMT を発展的に継承する新たな理論モデルが紹介され、TMT、ひいては実験実存心理学の今後の課題や可能性について討論がなされた。

Ⅱ.『家族心理学』『人間関係の心理学』『発達心理学』（おうふう）の刊行

研究会代表者の榎本博明氏および本研究会員が中心となり、「自己」と密接な関係にある心理学諸領域である家族心理学・対人心理学・発達心理学についてまとめられた『家族心理学』『人間関係の心理学』『発達心理学』（いずれも榎本博明編著）の 3 冊が、2009 年から 2010 年にかけておうふう心理ライブラリーとして刊行された。

この試みが、自己心理学のさらなる展開と議論の深まりに寄与することが期待される。現在、次の企画も進行中であり、今後も本研究会が中心となり、自己心理学の領域の確立とさらなる発展を目指していきたい。

Ⅲ. 定例合宿の開催

自己心理学研究会の定例合宿（夏期・冬期に一回ずつ）を開催した。2010 年は，2 月 27 日～3 月 1 日に長野県戸倉，8 月 5 日～7 日に岐阜県下呂にてそれぞれ開催し，研究会の会員による研究発表と討論を行い，自己心理学的研究の個別テーマに関する活発な議論が行われた。

Ⅳ. 研究会機関紙『自己心理学　第 4 巻』の発行

自己心理学研究会機関紙である『自己心理学』の第 4 巻について，2011 年 3 月に発行予定である。第 4 巻では，次の 5 名の論文を記載する（氏名かな順）：榎本博明（名城大学）・梶原恵子（九州保健福祉大学）・亀田研（名古屋大学）・山口智子（日本福祉大学）・矢野宏光（聖カタリナ大学）。

■ 研究会の代表者・連絡担当者

代表者：榎本博明

事務：中谷　陽輔